

第七分科会 地震グループ西部班 活動報告

石 黒 靖 彦

1、はじめに

第七分科会西部班では、昨年度に引き続き「千畳敷は浜田地震で姿を現したのか？」というテーマで地震について地質的または歴史的な面から勉強を行っています。メンバーは昨年度から継続の永田、和田両技術士に、新たに石黒が加わり3名となりました。

昨年度の活動の要点は次の通りです。

- ・幕末浦絵図の所有者の中村昭美氏（浜田市下府町在住）からの聞き取り
- ・現地での簡易測量
- ・過去の調査結果、文献の整理、検証
- ・資料のとりまとめ、新年例会での発表（千畳敷は浜田地震以前に隆起していたと考えられる）

昨年度の課題として、有識者の意見を聞く、各絵図の出典などの調査といったことが残りました。

2、今年度の活動

今年度は、昨年度の課題を念頭に置き、活動をしました。

1) 第1回会合

議題：今年度の活動方針について

日時：平成15年10月17日（金）

出席者：永田、和田、石黒

決定事項：有識者との意見交換

具体的には島根大学の山内教授に昨年度の活動内容について助言を頂く

2) 第2回会合

議題：有識者の考えを聞く（島根大学山内教授）

日時：平成15年11月1日（土）

出席者：松原、和田、永田、石黒

内容：山内教授からの以下のような内容について助言を得ました。

【波蝕棚についての考え方】

・波蝕棚の成因

波の強さと岩石の侵食に対する微妙なバランスによって形成（侵食に強い場合は崖を形成）
海岸の向きも影響する

・日本海側に特有の要因

潮位の変動...天文潮と気象潮（気圧、風）があり、太平洋側では天文潮が優勢で日本海側では気象潮が優勢

畳が浦は、気象潮の高潮位と低潮位の間中間的な高さとなる（天文潮の高潮位より畳が浦の方が高い）

冬は波浪の影響で潮位が高くなる。

【豊が浦の隆起について】

- ・高さの違う2つのノッチがあり、かつて隆起したことは地形的には間違いないがその年代は解らない。
- ・石田（1912）やそれを基にした今村（1913）は、目撃者からの聞き取り調査であり数値的な記載もあることから、浜田地震で0.9～1.2m隆起したとするのは信頼性は高いのではない。特に、目撃者が漁師である場合、潮位の変化に対して敏感であると思われる。
- ・絵図は最も波蝕棚が大きくなる低潮位時に書かれているのではないか（意図的に目立つようなときに書いている）？ 1m程度の潮位の変化があるとすると、浜田地震以前に現在の姿と同じように描かれていても不思議ではない。
- ・結論として絵図を基に浜田地震以前に隆起していたと考える必要はないと思われる。

島根大学の山内教授より、以上のような助言を頂き、昨年度の発表した内容の再考も必要となりました。但し、地の利を生かした調査は有効であり、例えばノッチの高さの正確な分布図の作成や波蝕棚の微妙な段差の測量は未だされていないことから行ってみる価値は高く、また、冬季に波浪が及ぶ範囲の観察も有効ではないかといった、今後へ向けての有意義なアドバイスも頂きました。

3、今後の活動について

島根県地学会でも同様なテーマで研究していて連絡を取り、山内教授から頂いたアドバイスを含め、共同で作業を進めることも考えています。また、市民への講演や発表会はそれらの資料がまとまった後とし、地震や防災を絡めた内容とした方が関心を持ちやすいと思われることから、それらを交えたテーマとしたいと考えています。